

◆三田評論と昭和一〇〇年

全国三田会論

小泉塾長に随伴して今日迄に歴訪した三田会数は約六十カ所、地域は北海道より九州にまで及んだが、まだ山陰と四国と東京の近県とが残されている。尚お此外、台湾、朝鮮、満洲国と一通り全部の三田会を洩れなく巡訪するには、相当の日数を要するが、日数と努力をより多く要することは、それ丈け義塾の勢力が如何に広範囲に亘って分布されているかを立証するものであって、誠に欣快に堪えない次第である。

今度「三田評論」が三田会特集号を発刊するに際し、三田会に就ての所感を徴されたが、偕と考え出すと余りに感想多くして筆力之に伴わず、結局思い出づるままに無遠慮に叙述する外はない。

三田会歴訪と云つても一つの三田会に半日か一日位しか滞在しないで次の地へ旅立ってしまうのだから、其見聞た

るや極めて皮相の譏を免れないであろうが、又それ丈にそれから感受した印象は頗る強い。

三田会の発展

最近各地の三田会が非常な躍進振を示したことは義塾内外の齊しく認める所であろう。三田会の発展とは、塾員相互の親睦が強固になり、塾員と義塾との連繋が密接になつて来た事である。各地三田会と塾との文書往復が著しく増加し、各地夫々の会合が非常に頻繁になり、又それに参加する塾員数が可なり多くなつた。「三田評論」の「三田会だより」の欄が近時甚だ賑つて来たことによつても察知し得られるのである。これに伴つて上京する塾員で訪塾せらるる向が増加して来たことも見逃すことは出来ない。これは塾への関心の強まりを具現した一つの証左と見てよ

坂村儀太郎

かろう。更に附言しなければならぬ一事は、今回の日吉寄附金募集に現わされた三田会の成績である。今日までの申込金額参百九拾八万余円の中、百万余円と云う巨額は、三田会の力によりて取纏められている。而して其取纏め先三田会数は全国百有余の中殆んど大半が参加している。義塾が創立されて以来、寄附金を募集した事は一再ならずあるが、三田会が斯くの如く母校発展のために一斉に立上った事は恐らく今回が始めてであらう。塾当局が非常に感謝しているのは勿論であるが、塾員諸君にとつても誠に喜ぶべき現象である。何が故に塾並に塾員双方にとりて慶祝すべきか。即ち三田会の価値を少しく述べて見たい。

三田会の存在価値

三田会は塾員相互の親睦を深め智識の向上を計らんがために、組織するものである事は勿論であるが、地方に於ける義塾勢力扶植の重大機関としての三田会の役割は一層強く認識せられねばならないであらう。他の大学に比し比較的卒業生の少い吾等は、特に相互の団結に留意して塾風の宣揚に努力せねばならない。それには三田会を組織し、これを助長し発展せしむるより外に道はない。地方の人はこの三田会の勢力消長の如何によつて、大体その地方の塾員の存在価値を測定してしまふ傾向がある。義塾卒業生は、卒業してしまえば母校と別れ友人と離れてしまつてよいと

云う学校とは違ふ。塾員は塾生の延長であり、塾関係者全体を打つて一丸とする一家社中である。三田会が生れ、これが発達して行くのは、塾としては必然の成行である。筆者は常に思う。学校に学んだ者にとつて、色々の幸福の中、一番有難い事は、同窓者の仲間人をする事が出来ること云う事だ。独学の人にはこの特恵はない。学校を卒業したのが最後、友人と別れ母校を無視する位なら、講義録でも読むか、ラヂオの教育講座でも聴取して勉強すればよい。学校時代の友人関係は全く純情の交りである。斯かる環境に於て相結んだ清い交際が、社会に出てから続けられる事は望ましい事である。世の中が世智辛くなればなる程、かかる純情の交友はいよいよ必要ではなからうか。

塾の卒業生は学生時代も卒業後も常に変りない。実に其団結心が固いと云われる所に吾等の誇りがあるのだ。卒業してしまえば塾員には何等の統一も連鎖もないと世間から見られる様では、官学の卒業生と何等変るところがなくならぬ。況んや其官学出身者でさえ、益々その親交を深める事に尽力している今日、数十年伝統的気風に育成された吾等同志が、御互いの三田会に対し、一致協力して当ることは当然の義務であり、又その喜びでなければならぬと考える。ある地方で塾員が少いから三田会を解散したいと云う希望を洩らした所もあったが、これはとんでもない思違ひである。少いが故にこそ一層その三田会を守護し、益々

その向上に努力せねばならないのではないか。三田会は地方の中核である。この中核の存する限り塾員団結の機運は必ず起つて来るであろう。塾員は将来増加するものであつて決して減少するものではない。

塾員諸君は何処までもその地の三田会に尽し、義塾の勢力を背景として活動する。そこに功利的觀念が伴うことは避くべきであるが、三田会が発展すれば勢の赴く所、結果に於て自己の価値を高めることになる。而して各個人々々の成功は再び廻つて其三田会並に義塾の名声を高める結果となる。「出身校はどちらですか」と云う質問は、未知の人とつき合う最初に出る。「義塾です」と答える。「へん、そんな学校聞いた事がない」では、一体どんな気持がするか。

三田会の現状

さて、然らば義塾三田会の現状は如何。本号は特集号として三田会の一覽表を別項に掲げるとのことであるが、現在殆んど全国に跨つて設けられている。一番会員数の多いのは東京で、次に大阪、神戸、名古屋、京都、福岡の順であらう。

塾員数は約二万人であるが、この中、京浜間在住者は約其半数の一人余になつてゐる。次いで京阪地方に二千五百余名、愛知の約五百名、福岡の約四百名である。残りの一万六七千名が地方に散在している。

地方別の三田会数は内外相合して約百カ所で、一つの県に二つ以上の三田会が設けられている所もあり、一つの本部が其県のいくつもの支部を統轄している所もある。

元來三田会は塾の指令により設けられたものでなく、其土地在住の塾員諸君により自然的に設けられるに至つたものであるから、別段三田会を統制する様な八釜ヤカマしい規則もない。此辺はまことに塾らしい行き方である。

事務所は大抵その三田会の幹事の自宅、又は幹事勤務の会社内に置かれている。大都会には堂々たるクラブを持ち、事務員を雇用して、大組織の下に経営しているものもある。東京、大阪等はその代表的ものである。

役員は会長、評議員、顧問等を設けている所もあれば、幹事丈の所もあり、その土地々々の事情に応じて役員数を定めている。会報は東京、大阪、神戸、京都、三重等は定期的に発刊し、また仙台、和歌山のように随時必要により刊行しているものもある。会員名簿は全部の三田会で作製していると云つてよからう。会費の高は一定していない。

会合は春秋二回の定時総会は勿論、毎月一回定日を決めて会合する外、必要により臨時大会を開いている向も多い。会の職務としては、会員の親密を計り智識の向上に資する外、慶弔事務に至るまで取扱つてゐる。尚お塾として毎年施行する夏季巡廻講演会の開催、塾の教職員の地方出張、塾生諸団体の遠征、見学旅行等の斡旋等、枚挙に遑とま

がないくらいである。

筆者が巡遊して見た所では、塾員の親交の度は他の如何なる学校の同窓会に比較しても優るとも劣っていないと確信した。実に和氣霽々たるもので、中には家族迄も其三田会に合流して遠足、旅行等をしている所もあった。東京や大阪と異なり、地方では交通の便が十分でない。この不便な交通を物とせずして三田会に出席している諸君を多分に見受けて全く感激させられた。又塾員と塾生と父兄が三者一体となつて、相互に連絡し合っている所などもあり、チームを編成して運動競技に参加している元気のいい所もあった。塾生の就職の斡旋まで幹事が奔走している美しい話も耳にした。

地方に住んでいると塾が殊に懐しくなるものと見える。塾を卒業してからの方が、一層愛塾心が旺盛になると云う言葉は到る処で聞かされた。塾は不思議な魅力を持つている。福澤先生の遺徳が然らしむるのであるか或は塾特有の雰囲気によるものか、其辺の消息はハッキリしないが、筆者などは塾長に随行して始めて知つた人達から、一見旧知の間柄の様に交際せられて、涙が出るくらい嬉しく有難く感じ、又塾員としての誇りを感じた。

三田会発展に就いての私見

三田会が日々進展向上の一途を辿っている現在、何も三

田会将来の発展策に対し私見等述ぶる必要はないのであるが、尚お一層その団結の強化と内容の充実を計るには如何にすればよいか、甚だ僭越ながら体験を基礎として二三の愚見を披瀝して見たい。但しこれは筆者が塾当局の立場で云つていゝのではなくて、一塾員とし斯うもしたら如何かぐらゐの所で述べているのであるから、其点は呉々も御諒解の上、御一読願ひたい。

三田会発展策としては三田会自体の立場と塾当局の両方面より考究する必要がある。三田会そのものにとつて先ず考ふべき事は、幹事の人選であろうと思う。幹事が適材適所に配置され各役員間の連絡が完全に結ばれていけば、仕事は活発になり、会の基礎は益々強固に会員数は愈々拡大増加するに至るであろう。然らば幹事の人選を如何すればよいかと云う事になるが、筆者の考えでは、あまり大先輩ばかり並べてはいけないと思う。大先輩では既に老体であり、仕事も相当多い人達であるから、実際の煩雑な会務を処理して行く上に無理と不便が多い。

従つて頻繁に会合を催す機会が兎角おろそかになり勝ちである。さりとて若手の幹事ばかりでもいかぬものである。若手揃ひでは仕事に活気はあるが、これを統轄、抑制して、良く先輩と後輩との間柄を円満に処理して行く方に欠陥を生ずる。やはり相当の年輩の人で、ある程度その地方の事に抑えのきく先輩が一人や二人居なくてははいけない

ようである。先輩も必要、若手も必要だ。この間の関連に欠ける様な幹事の割当を拵えていては会が進展する故はないのである。

又あまり幹事が多すぎても困る。船頭多くして舟山へ登るの結果を招く危険がある。幹事の人選は最も難かしいところであろう。尚お幹事中にはなるべく其土地土着の人を一、二名選出しておくのが賢明であると思う。何となれば勤め人は会社の都合でいつ何時、転勤させられるか解らない。折角その土地の事情に慣れたかと思うと転勤では如何にもならないのである。更に幹事は御都合主義でいい加減に任命しないで人望もあり、経済的、時間的に相当余裕もあり、愛塾の精神の強烈な、骨身を惜しまないで幹旋してくれる様な人を選ぶべきである。当り前の事を云う様だが、何の会でも幹事の問題ほど重要性を持つものはない。会の消長如何は人にありと云つても過言でないと思う。然し斯ういう犠牲的精神の人があつてこそ、すべての仕事はスムーズに運行するのである。学内にも種々の学生の諸団体があるが、よく統制のとれた団体には、素質のよい学生が幹事に揃っている。斯ういう学生はやはり他の事にも間に合う人で、就職人物試験の時などすぐ目につく。塾には斯ういう風に人の先に立つて働く事を嫌忌する人が概して多い様だ。品がよいと云えばいえるが、品がよいと云う事は消極的、保守的気分に流れ易い。今の世の中では品のよ

いばかりが能ではないのである。積極的なむしろ蛮勇の氣概があつて欲しいと思う。幹事として会より選出される事を誇りとし、選出された以上は一生懸命やる。又会員一同も之を選出した以上飽く迄其等の人を援助、鞭撻すると云う風にならなければいけないのではないか。幹事と会員の相互関係が完全に結ばれてこそ始めて会の隆昌は期待されるのだ。この問題について十分吟味しておくことが肝心である。

次に幹事は塾当局と通信を頻繁にし、絶えず学校の近況を会員諸君に報導する事が必要である。さすれば偽塾生や偽塾員に跋扈跳梁の隙を与えないで済む。更に其土地の希望なり近況なりを塾へ報導する事である。斯くして両者の接触が緊密になると、学校としても其三田会に対して積極的に連絡を持つ素因が出来て来ることになり、又一方会員は幹事や学校からの積極的活動によつて自然に三田会に関心を持ち、母校愛に燃えて来る。集会は常に賑うと云う事になるのではないかと思う。又塾員丈でなく、出来れば機会ある度に父兄や塾生や塾関係者に呼びかけて、三田会に出席せしむる様に仕向けることも大切である。この方法は既に施行している向も多数あるが、塾の認識を高め、先輩と後輩の関係を連結させるのに非常に効果的な方策だと思ふ。ただ会合のみ開いて酒肴を共にして散会するだけでは誠に勿体ない。先輩は後輩を導き、後輩は先輩を敬愛し、

相互に塾精神の発揚、普及のためすべての方面に働きかける道を求める様にしてこそ、三田会の意義が生れて来る。父兄に塾の近況を報告したり、塾生の就職斡旋に一肌抜いでやると云った風な仕事は、煩しい仕事であるが、この煩しい所に会に対する大きな吸引力が潜んでいるのではなからうか。

更に筆者は大都会に出で、名をなした先輩塾員諸君へ希望したい。それ等の人は、時間と事情の許す限り、なるべく郷土を訪れ、訪れた時は必ず三田会に出席し、三田会の人達はこれを迎え歓迎宴を張ると云う様な事もやつて見たら如何であろうか。出来れば其地の中学校なり小学校なりで講演せらるれば申分ない。自分達の先輩に斯かる知名の士を持つと云う事はどれ丈の誇りと喜びを感じしめるであろう。これは延いては三田会を旺盛ならしめる大動因となると思う。先輩諸君が塾並に三田会と云う事を考えて、物質的に精神的に其郷里の三田会に助力せらるるならば、其将来の発展は驚くべき勢を持つて延びて行くであろう。

会合はなるべく経費の掛らない様に、簡単でよいから度々開く事が必要だ。会員に負担の過重を強いると会は衰兆を来す。当然の事であるが、これが仲々むずかしいのである。安直では会の内容が単純で面白くない。然らばといって会費が高ければ後輩は出席出来ない。この間のやり繰りは一寸頭が要る。たとい酒肴は粗末でも、その会に出席す

ればそれ以上の精神的愉悅があると云った仕組を考案するには、会話の内容を豊富にするにある。それには塾との通信を盛んにするとか、上京の時には塾を訪問するとか、連合三田会に出席するとか、智識を広く求めるとか、会員と親密に交際するとか、種々の方法があるう。

塾の先輩諸君に郷里訪問を奨めたが、筆者は更に最近の塾卒業生に就ても一言したい。大体塾の卒業生は京浜並に阪神地方の大都会に集中している傾きがある。地方に出ると塾出身者数は他の学校に比し比較にならぬ程少い。殊に新聞界、教育界等には暁の星の如き有様である。将来の事を考えると心細い限りだ。幸に其少数の人が質のいい可なり重要な地位に座っている人が揃っているからいい様なものの、それで安心は出来ない。斯う云う人達こそ第二世の人材を今より植え付け、育成して行くため特別の配慮あらんことを切望に堪えない。又塾卒業生も地方進出の臍はらを固めて奮闘しなければいかぬと思う。否な単に三田会のある地方のみでない。塾員が一人も戻らない地方に迄進出して、自分の力で三田会を組織する位の意気があつて欲しい。ブラジルに住んでいる数名の塾員や普通部出身の人達が、最近ブラジル三田会を結成し、異郷の地に於て相互に提携して活躍を誓わんとしているとの話を、過日帰朝した外務省の人から聞いて胸を打たれた。ユニオンジャックの顰しんへるところ太陽の没する地なしと豪語せる英国の如く、

三色旗の閃めかざるところ世界何処にもなしと呼び得る時の速かに来らん事を祈っている。

以上は大体地方に於ける三田会に就ての私見の一端であつて、東京とか大阪とかの大組織の三田会又は慶應俱樂部に就ては自から別の方策があるであろうが、その辺は私などの説を立てるまでもなく、それぞれ御研究のことであらう。

塾当局に於ても対三田会の事務は、塾内に於ける教育に劣らず重要視しており、常に研究を怠らず、種々の方策を持つており、それらの中既に実行に移しているものもあれば、計画中のものもあり、更に進んで考究中のものもあると聞いている。二者両々相俟つて大慶應義塾の将来の爲め今後共益々努力邁進し、塾の塾たる家族主義の眞価を天下に誇示したいものだと思う。

義塾関係諸団体に就て

地方三田会と共に閑却する事の出来ないものに義塾関係諸団体がある。大別すると年度別、勤務先別、職業別、趣味別、其他に分類する事が出来よう。年度別とは大正何年度会、昭和何年度会と云うが如きものである。聞く所によると米国の大学の中には大学の当初に於て卒業の年度会名を附し、トーチライト、プロセシヨンの時などはこの会名を記した行燈を各学年の先頭に押し立て、行進するとのこ

とである。誠に盛んなものだということである。近年塾でもこの年度会が隆盛になつて来て、筆者等の組織している大正十一年度三田会の如きは、毎月例会を開いているが、例会で四十人位は大抵出席する。大正八年三田会に至つては毎月の例会は勿論、会員名簿を年次作製し、会員間の慶弔から就職の斡旋迄して、誠に羨しいものがある。

積立金の利子で種々な催しものも出来る様になつてゐるとか、幹事諸君の気焔は高い。最近になつて昭和年度の会が続々組織されて来た事と、更に明治時代の年度会、殊に三十五年から四十五年位の所が盛んに活躍を始めて来ている。この年頃は丁度五十歳前後に当るので、人世五十知天命とでもいおうか、旧友が頻りに懐しく慕わしくなるのである。中には物故した友人の霊を弔うために、京都の知恩院で施餓鬼を挙げて貰つた会もあり、恩師を全部招待して箱根で、全くの腕白時代の昔に返り塾生生活時代の様な大さわぎをした会もある。筆者がある明治年間の三田会に招待された時、当日欠席した友人からの挨拶状を幹事が一々読み上げると、一座水を打った様に謹聴し、その跡で色々の噂話に花が咲くと云つた様で、その美しい情景には感動されたものだ。實際友人程貴いものはない。同じ学校に学び、同じ年度に卒業すると云う事は実に深い縁である。年度会が発達に向うのは当然である。将来共各年度三田会が益々活躍する事を祈つて止まない。

次に勤務先による三田会である。鐘紡三田会とか、明治生命三田会とか云うのがそれで、各社在勤の塾関係者が組織している三田会を云う。其数は夥しく多い。そして非常に盛んなものである。これは連絡がつき易い事と、塾と云う名の下に団結心が一層濃厚になるためであろう。今度の日吉寄附募集成績で見ても、会社別三田会扱の取纏額が約五十万円に達している。其取纏先数は約五十個所である。中には年に一度の慰安会を節約して応募してくれた所もある。筆者は職掌柄たびたび日吉寄附を引合に出すが、日吉寄附の如何を以って愛塾心の強弱、三田会の興廢を云々するのではない。然しこれを以って其三田会の団結心の強弱連絡の遅速、母校愛の厚薄等を示す一の反映と見ることは差支ないであろう。この種の三田会が盛んなる限り、塾員の入社数も多くなり、会社内の塾の勢力は衰えない。塾員は自己の力によらず、三田会にのみ頼りすぎてはならないが、実力を以って正々堂々事に当るに於ては、何々三田会を組織してこれに出席する事に遠慮は要らない。会社別三田会のある所、却って塾員の信望こそ高まれ、非難される理屈はない。

此外職業を同じうする同業別三田会や、普通部、商工、商業、幼稚舎等の卒業生による年度、クラス会等種々の団体がある。珍しい所ではジャーナリストの結成を図っている廿日会や、音楽三田会、映画人三田会等がある。一々説

明したいが省略する。

各地三田会を横の連絡とすれば、諸団体三田会は縦の三田会である。このクロスした地点に義塾が存在する。縦横無尽に張り廻らされた連絡網の中心に義塾が存在してこそ、その将来の發展は期待される。塾員の団結、塾員と塾との連絡、それこそ義塾の将来を賭けた大きな問題である。小泉塾長は本年一月の「三田評論」紙上でこの問題の重要な事を喝破し、塾員間の組織、塾との関係を以って大学当然の任務と論じている。義塾の栄える所三田会は振う。三田会の進む所、義塾は伸びる。形影相伴う両者の前途に栄光を祈念しつつ筆を止める次第である。

【二九三六（昭和十一）年八月号（四六八号）掲載】

（坂村は小泉信三塾長の秘書。小泉は塾長就任後、義塾拡充のための資金募集を先導する責任から、日本全国の三田会を訪問し、坂村はそれに随伴、地方卒業生との連携に貢献した。この頃は八月号が特別号で、この年は三田会特集号であった。）